

森林生態学・育林学研究室

【農学部森林科学科】



学生から

宇都宮大学の森林科学科には9つの研究室があり、木を伐採する機械について勉強する研究室や、キノコのバイオテクノロジーを勉強する研究室もあり、一言に「森林」といっても、非常に幅広く分野が存在します。その中で、僕の所属する森林生態学・育林学研究室では、「森林を守る」ということを勉強する研究室であるといえます。

この研究室の最大の特徴は、実際に森林の中に入ってデータを直接採ってくることです。例えば樹木の太さや高さを測定し、順調に成長しているかどうかを調べるもの、スギ・ヒノキの伐採跡地にどんな植物が生えてくるかを調べるもの、使われなくなってしまった森林の中にどんな種類の虫が生息しているかを捕獲して調べるものなどがあります。僕たちはこれら



落ち葉堆肥づくりのための落ち葉採集の様子

を「フィールドワーク」や「調査」と呼んでいます。

近年、地球温暖化をはじめとする環境問題が叫ばれる中、僕たちの研究室は、調査を通じて、自然が発しているメッセージを受け取り、それを人間が理解できる形に表現するといったいわば翻訳者のような役割を担っているのです。ところが、この「調査」を巡って毎年思いもよらない様々なドラマが生まれます。例えば、茂木町での里山管理と植物の種類との関係を調べた研究では、かなり奥深くまで森の中に侵入していきます。この時に、イノシシやスズメバチといった僕たちの恐怖心を煽る「天敵」と遭遇することは少なくありません。

那須烏山市での落葉堆肥生産に適した森林の構造を調べた研究では、実際に落ち葉を掻いて落葉堆肥を作る際に、落葉の中にカブトムシの幼虫が21.7kgも含まれていたこともありました。高原山での急斜面地に植林されたス



ブナの木に登って調査している様子

ギ・ヒノキ林内の植物の種類を調べた研究では、クマイチゴが足元に密生していて、歩きにくかったため、伐り株の上で休憩しようとしたら足を滑らせて斜面を三回転半も転げ落ちたという人もいます。

他にも高原山のブナ林でのブナの種を食べる蛾の種類を調べる研究では、樹高25mもあるブナに命綱をつけて登ります。これらの調査はポイントまで比較的距離が短いので日帰りです。しかし、調査の規模が大きい場合や、調査地点まで遠い場合は、宿泊する場合があります。研究室名のバックの写真にもなっている山形県小国町の国内最大級のブナ林の研究では、満天の星空の下、テントを張って寝泊りしたこともありました。

今考えてみると、どれも楽しい思い出です。しかし、忘れてはいけないことは、これらは全てチームで行うということです。そのため、僕たちはチームワークが大切であるということも学びます。調査を通じて成長した僕たちのマタタビのツルのような絆は、卒業しても、長く、強く結ばれていることでしょう。

平成21年度大学院農学研究科修了 染谷潤一郎

教員から

私たちの研究室は、森林の樹木を主な対象として、どのような仕組みで森林が世代交代しているかについて研究を行っています。この中で、栃木県と山形県のブナ林やアジアの熱帯林に調査区を設け、長年に亘って、その中の木の成長、生き残り、結実周期、実を食べる昆虫と結実周期との相互関係などを調べ、森林の基本的な仕組みの解明に取り組んでいます。

一方、スギやヒノキの人工林や里山の放棄された雑木林など人に利用されることで維持されてきた森林を、これからどのように育てていくのかといった応用的な課題にも取り組んでいます。このように、奥山から里山まで幅広い森林をフィールドとして、野外での生き物の観察・実験など、徹底した現場重視のアプローチを通して日夜研究に励んでいます。

農学部教授 大久保達弘
助教 逢沢峰昭